

氏 名	イグナシオ アリスティムニョ Ignacio Aristimuño
学位(専攻分野)	博 士 (農 学)
学 位 記 番 号	農 博 第 929 号
学位授与の日付	平 成 9 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	農 学 研 究 科 林 学 専 攻
学位論文題目	STUDY ON VISUAL ASSESSMENT AS A BASIS FOR LANDSCAPE CONSERVATION — Case Study in the Western Urban Fringe of Kobe City — (景観保全のための視覚的評価に関する研究—神戸市西区のアーバ ン・フリンジを事例として—)
論文調査委員	(主 査) 教 授 吉 田 博 宣 教 授 小 橋 澄 治 教 授 高 橋 強

論 文 内 容 の 要 旨

アーバン・フリンジは、農村と都市との間にあって農村的土地利用と都市的土地利用が混在する過渡的な状況にある地域として定義づけられる。このような地域では、都市的な開発にともない景観も変化するとともに、都市からの新住民と農村に居住してきた旧住民との間の文化的、社会的な差異が地域計画のうえにさまざまな問題をひきおこしている。

本論文では、アーバン・フリンジのひとつの典型的なケースとして、ここ15年間に都市的開発が進展し、景観の変化をひきおこしてきた神戸市西区伊川谷地域をとりあげた。この地域の南部に位置する池上地区は、近年都市化されてきた地区で、市街化区域となっており、都市部からの転入者が多い。これに対し北部の前開地区は市街化調整区域であり農業振興地域に指定されており、前開上、中、下の農村集落と農地が展開する。

本論文は、景観の変化や保全と開発に対する両地区の住民の、主として視覚的な評価を明らかにし、地域計画の基礎的な資料を提供することを目的とした。その調査では、景観に対する住民の認知や選好を言葉や文章のみで問うのではなく、空中写真、スケッチ、風景写真、シミュレーション画像とアンケート調査を併用し、住民の意識する景観の視覚化を試み、それを通して住民の視覚的評価を明らかにしようとしたものである。以下に本論文の概要を章を追って説明する。

第1章では、テーマに関係する事項について概念規定を行った。ついで、調査対象地域の土地利用の変化を分析し、景観の特徴を明らかにした。

第2章では、国内外のアーバン・フリンジに関する文献調査を行い、アーバン・フリンジの概念を規定し、その開発パターンの類型化を通して調査対象地域の性格や開発パターンを明らかにした。それをふまえて、住民による景観の視覚的評価の地域計画における重要性を論じるとともに、視覚的評価の有効な方法を検討し、以下の章で示す独自の方法論を提示した。

第3章では、伊川地域全体の範囲で住民に対して景観の変化、景観の保全と開発などに関する選好調査を実施した。ここでは地域全体の空中写真を住民に示し、景観の変化、保全、開発などの質問に対して、回答すべき景観・地域を写真上にマークさせる空中写真認知法を用いた。これをメッシュ・データに変換し住民の選好を分析した。その結果、新住民では保全に関する選好が周辺の山林や農地など自然的景観に拡散的に広がる傾向をみせた。これに対して旧住民の保全対象は農地のほか、旧地区にある歴史的文化財としての寺院とその背景の山林に新住民よりもより強く集約的に収斂し、新旧住民の保全に対する意識の質的差異が明らかになった。一方、両地区を縦貫する一つの小河川に対する保全の意識は共通的で、空間的、景観の共有性が示唆された。さらに開発に関しては両地区の中央に位置する高速鉄道駅一帯が共通する地区として把握された。このように新旧地区の住民による選好の差異性と共通性が明らかにされた。

第4章では、前章で景観保全や修復の共通性が明らかになった小河川をとりあげた。住民の考える保全すべき視覚的な姿を明らかにするためイメージスケッチを用いてSD法によって分析した。その結果、河辺の自然的な保全と岸辺の散策空間の必要性が明らかにされ、そのモデルが示された。

第5章では、第3章で開発地区として共通的に選好された高速鉄道駅地区を対象に、景観シミュレーションによりその選好の視覚化が試みられた。開発に対しては、“Nimby (Not in my back yard)”の現象が見られ、集落や住宅からやや離れたこの地区が開発の共通した社会的中心として位置付けられ、農村的景観に調和した低密度開発の選好が明らかにされた。

第6章では、第3章でその景観保全が強く求められた歴史的文化財を対象に、空中写真と環境デザインの評価に関する設問により、住民の視覚的選好が検討された。新旧住民では「訪問者の態度」と「土着の態度」が明らかになり、前者では適度な観光、レクリエーション施設への関心が高く、後者では伝統や日常的愛着が強いことが判明した。

第7章では、とりまとめと次の3つの計画的概念「地域景観と調和したグリーンウェイとしての小河川の保全」「地域の社会的中心高速鉄道駅地区の開発」「文化的シンボルとしての文化財の保全と整備」を提案した。

論文審査の結果の要旨

農村的土地利用と都市的土地利用が混在する過渡的な地域であるアーバン・フリンジでは、近年、農村景観や自然環境を保全し、かつ、都市近接農村としての土地利用を活性化しようとする研究や施策が試みられている。一方、このような地域では新旧住民が混住し意識の多様化が予測される。地域計画ではこのような住民意識をより具体的に把握しておくことが求められ、かつ、それを景観計画に近づけるためにはできるだけ視覚的に把握しておくことが望まれる。

本論文は、都市的な開発が急激に進展した神戸市西区伊川谷地域を、アーバン・フリンジの事例としてとりあげ、新旧住民の地域景観に対する選好を空中写真認知法や景観シミュレーションによるデザイン評価手法を用いて調査することによって、新旧住民による選好の差異性と共通性を検討するとともに、住民の景観に対する視覚的評価を抽出して、地域景観の保全と開発に関する計画的提案を行ったものである。

評価すべき主要な点は以下のとおりである。

1. 国内外のアーバン・フリンジとその景観に関する文献資料を調査し、開発パターンの類型化を通して調査対象地域の性格や開発パターンの特徴を確認するとともに、そのような地域での景観計画の重要性を示した。

2. 住民の選好を言語的表現に加えてさらに視覚化されたものとして把握するため、アンケート調査を併用しながら、第1段階として空中写真を用いて課題とする景観や地域を二次元的に認知させて特定し、その景観を第2段階としてイメージスケッチや景観シミュレーション画像などによって三次元的、視覚的に選好させることによって、景観の視覚的評価を抽出するという独自の方法の有効性を示した。

3. 新旧住民の景観に対する認知や視覚的評価の差異がこれまでの居住環境や社会的環境によるところが大きいことが明らかにされた。一方、景観保全や開発に対して意識が共通し、意義が共有される空間が抽出された。それは、例えば新旧両地区を貫通するグリーンウェイとしての河川や社会的中心としての鉄道駅地区であり、文化的シンボルとしての歴史的空間であることが確認され、地域の景観計画で重要な役割を果たすことが示された。

以上のように、本論文は景観変化の激しいアーバン・フリンジをとりあげ、住民による景観の視覚的評価を明らかにし、それをもとに地域景観の保全と開発を検討したもので、環境デザイン学、景観計画論に寄与するところが多い。

よって、本論文は博士（農学）の学位論文として価値あるものと認める。

なお、平成9年2月14日、論文並びにそれに関連した分野にわたり試問した結果、博士（農学）の学位を授与される学力が十分あるものと認めた。